Title	「過去の克服」の先にあるもの： シュリンクの短編『割礼』を手がかりとして
Sub Title	Was kommt nach der Vergangenheitsbewältigung? : Anmerkungen zu B. Schlink
Author	八木, 輝明(Yagi, Teruaki)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2005
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. ドイツ語学・文学 No.41 (2005. 9) ,p.1- 28
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10032372-20050930-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「過去の克服」の先にあるもの

——シュリンクの短篇「割礼」を手がかりとして——

八 木 輝 明

I

ベルンハルト・シュリンクの『朗読者』（1995年）は5年後の2000年に日本で出版されてまもなくベストセラーとなり、注目を浴びた。それ以来、他の作品もあいついで翻訳出版された。1944年生まれのシュリンクは、私立探偵ゼルプシリーズ3部作を含む4冊のミステリー小説で作家として有名になり、多くの推理小説賞を獲得した。『朗読者』が世界的ベストセラーとなり多くの読者を引きつけた背景には、ひとつにはこのミステリー小説で示されたシュリンクの語りの技法のうまさがある。少年と大人の女性の出逢いと男女の関係、ナチス強制収容所看守であったこの女性の裁判を傍聴するドイツ戦後世代の主人公の思いをつづった小説の内容が、新鮮な感動を与え、忘れかけていたドイツの過去の問題を世界の読者にあらためて印象づけたのかもしれない。シュリンクは現在小説作家である一方、ベルリン・フンボルト大学の法律学教授であり、州裁判所判事を兼務している。雑誌などで文学者としてインタビューを受けたり、コメントを寄稿するかたわら、ドイツの教育問題、ハイジャックテロ防止法案などに対してもエッセイ、評論を公表している。

世界的ベストセラー作家という点で、1999年、ノーベル文学賞を取ったグンター・グラスは、ドイツ現代作家として大きく注目されてきたが、そのグラスや他の戦後作家と比べ、シュリンクのみに関して書かれた評論は今のところ少ない。日本のドイツ文学史のなかでの記述も、まだこれか

らという状態である。4冊のミステリー小説以外に、いわば純文学として発表されたものとして、『朗読者』のほかには、7編の短篇を集めた『逃げてゆく愛』（2000年。日本では松永美穂訳により2001年出版）の2冊しか公刊されていない。今年（2005年）新しい小説の出版をひかえている、と自ら語っているが、詳しいことはわからない。したがってシュリンクについて書くには、今のところこれらわずかな作品の他に、雑誌（おもにシュピーゲル誌）に書かれた評論、エッセイ、インタビューを取り上げて作家の実像に迫っていく以外にない¹⁾。

以下はそのささやかな試みであるが、おもに『逃げてゆく愛』の中の「割礼」という小品がその中心となる。この作品はとりわけそうであるが、他のシュリンクの作品、作家活動の背景には戦後ドイツ、それもきわめて現在に近い時代の精神状況が映し出されている。『朗読者』がそうであるように、シュリンクの作品世界には舞台となった時代の状況が色濃く投影されているものが多い。少なくとも今まで出版された作品からは、ドイツ現代史を書き残そうとする年代記作家の特徴が際立っている。しかしのちに詳しく述べるように戦後ドイツのあり方そのものが、歴史の記憶に侵食され、その傷跡に向き合い、過去と取り組んでいく以外に個人のアイデンティティを確立できない境遇の中で、人間を探求し描写するドイツの作家たちは、否応なしに時代のトラウマを背負い、引きずっていくほかないのかもしれない。この小論の意図は、「割礼」という作品を手がかりにして、作家シュリンクがドイツの過去と現在の問題にどのように関わろうとしているのか、ドイツで作家は社会に対してどのように位置づけられているのかを探るところにある。

1) ミステリー小説はすべて小学館から出版されている。『ゼルプの裁き』2002年、『ゼルプの殺人』2003年、『ゼルプの欺瞞』2002年、『ゴルディオスの結び目』2003年。法律学者として、ナチスの過去の問題を扱ったものとして『過去の責任と現在の法——ドイツの場合』岩波書店2005年がある。

II

ナチズムとホロコーストの歴史は、戦後 60 年たった今日までドイツ人の「アイデンティティの一部」になっている²⁾。「割礼」の主人公は、そうしたドイツ人の「若い世代」のひとりとして登場する。ハイデルベルク大学で法律を専攻するアンディは、1 年間の給費留学生としてニューヨークに来て、コンピュータソフト開発を手がけているユダヤ人女性サラと 2 ヶ月前に知り合い、恋に落ちる。

小説のはじめの章は、サラの弟のバル・ミツヴァ（ユダヤ人の伝統的儀式）を祝うパーティが終わり、アンディがサラの叔父アーロンから、サラの家族・親族がニューヨークで成功するまでの受難の歴史を聞かされることから始まる。この親族の中にはアウシュヴィッツで殺害された者もある。冒頭から読者は、因習的儀式を重んじ、親族の固い絆に結ばれたユダヤファミリーのまっただ中で、主人公アンディが緊張にふるえるようにしてひとりたたずんでいる姿を目撃する。

2 章で、サラの叔父がなぜ親族の歴史を自分に詳述してくれたのか疑問に思うアンディは、何気なく恋人に問いかける。

「なぜ、アーロン叔父さんはほくに君の家族の歴史を話してくれたのだろう。興味深く聞いたけれどなにか他の理由があってわざわざ話してくれたような気がするのだけれど」

「他の理由ですって。なぜ叔父はあなたに話したのかしら」

「その理由をまさしく君に聞いているんだよ！」

「偉そうに、聞かないで！」³⁾

2) この言葉は VIII 章で引用する、2005 年 1 月シュレーダー首相の「アウシュヴィッツ解放 60 周年」のスピーチで語られた言葉。

3) Bernhard Schlink „Liebesfluchten“ Zürich 2000 S.204

こうして始まる二人の会話は、恋人同士の対話というよりつねに緊張と危険をはらんだ口論という印象を受ける。読者によっては、すでにこの二人の関係は始めから亀裂、あるいは破綻した形で進行していると感じ取ることができる。時おり愛情に流されて、和解するように愛し合う二人の姿が描写されるが、それはあやうい二人の結びつきを強めるどころか、次の口論に備える助走のための息抜きの効果しか与えない。「アンディは二人の口論のことを想いかえした。二人が言い争ったのははじめてだった。あとになって考えてみると、この口論はその後の口論の前兆であるように思われた。」2章最後のこの予感、このあとの小説のストーリーを予告している。ストーリーといっても、全体は登場人物の会話が中心となって成り立っている。しかも二人の出会いの描写の仕方は、はじめから暗く不吉な予感を漂わせている。つまりこの小説は二人の男女の終わりの始まりからスタートしているといえる。

恋愛小説として、ある意味で単純な性格の主人公をあえて登場させた小説をなぜシュリンクは書いたのだろうか。「ゼルプ」シリーズ3部作でも『朗読者』でも他の短篇でも、登場人物はそれぞれ陰影をおび、ある程度複雑な性格を持っている。彼の他の小説と同じように、男の主人公の視点から描かれているとはいえ、アンディとサラの主人公の性格描写は一元的、画一的、平板である。サラというユダヤ人女性の異文化観、その単純なまでの、ドイツとドイツ人に対する偏見からくる反発に防戦一方の、しかし執拗に反論するドイツ人アンディの姿は気の毒なくらいいいじらしい。「割礼」で、主人公二人をあえてこのように性格づけた、あるいは性格づけにせざるを得なかったのは別のところに理由があるように思われる。

しかしその理由を探る前に、次章でこの小説の緊迫したいくつかの会話、対話を紹介してみたい。

III

アンディとサラがはじめての口論をした2章から、3章～9章への決定

的な激論にいたるまでには、お互いの兄弟、親族、知人が登場し、生活習慣、宗教観、国民性、歴史観、言語風習の違いに至る多彩な議論が繰り返られる。常にその場に居合わせるのはアンディで、作者シュリンクと部分的に重なる視点から彼は反対意見を述べ、コメントし、感想を記していく。いつもかなり手きびしい相手のテーゼに対して、アンディはそれを受け止めつつアンティテーゼを提出し、対立する見解を統合しようとする。その試みは3章のはじめで、3歳と2歳の息子を持つサラの姉ラケルとのドライブ中にかわされる次のような会話の中に表われている⁴⁾。

「きみにとって、最悪のことってなに？」……

「最悪のことは、わたしの息子たちが、ユダヤ人でない女性と結婚することでしょうね」(……)

「どうしてそれがそんなに悪いことなの？」

「彼らはなにもかも失うだろうから。……(ユダヤの様々な伝統的生活習慣、風習が列挙される)ユダヤ人の女性とでなければ、息子たちは誰とそんなことができて？」(S.234)

「自分が信じている宗教を、消滅してもいいと思えるほど少ししか信仰していないのなら、それはあなたの問題よ。わたしは、自分の宗教が生き延びることを望むし、わたしの家族にもその信仰とともに、信仰を守りつつ生きてほしいの。ええ、わたしはユダヤ教が特別だと思っているわ。(……)」(S.237)

さらに、アンディの誕生パーティ出席者の一人が提供したネガティブなドイツ体験の話題がきっかけになって、ドイツで使われている軽い民族的

4) III, IV章の「割礼」からの引用はすべて新潮社『逃げてゆく愛』松永美穂訳から行い、それぞれ引用の最後にページを記す。

なジョークがサラの過敏な神経を刺激する。

サラが昔教えた学生の一人は、交換留学生としてフランクフルトで一年を過ごしたことがあった。彼は時間に正確で快適で清潔なドイツの列車について熱心に語り、ドイツのパンやリンゴ酒、タマネギケーキやザウアーブラーテンについて話した。しかし、ドイツ語は彼をしばしば困惑させたのだそうだ。ドイツ人は混乱状態のことを「ポーランドの経済」にたとえ、大慌てすることを「ユダヤ人のせっかち」と言う。なにかをやり過ぎてうんざりしたときには、「毒ガスで死にそう」と言うのだ。(S.240)

「忠実な小さい兵隊さん、どうして自分でもいいと思わないことのために戦おうとするの？ 悪意のある民族的ジョークを弁護すべき義理なんて、あなたにはないのよ。ガス殺人とか、ユダヤ人のせっかちなんで——ひどい侮辱だわ」(S.242)

こうした反応を示すサラの特徴のひとつは、まわりの世界すべてに対する「冷やかし」の口調、「なにものに対しても容赦しない悪口」の持ち主だと小説のある箇所の説明されている。こうした恋人を伴って、アンディが故郷のハイデルベルクに戻り、オラーニエンブルク強制収容所跡や首都ベルリンを訪ねる場面は、この若い二人のお互いのアイデンティティを意識の底から呼び覚まし、緊張と皮肉の入り交じった会話をせざるを得ない状況へと導いていく。この危うさは、読者にとっても想像にあまりあるものだ。戦争中、経済担当官のような職務に就いていたアンディの父と話したあと、サラはアンディに次のように述べる。

「(……) ドイツのおかげでなんとか政権を維持できたムッソリーニのもとで、一種の経済担当官はなにをしたのかしら？ フランスからドイツへの穀物やワインの供給を手配したって、どういうこと？ フランスでもロシ

アでも、戦利品の獲得、つまり強奪と略奪が仕事だったのよ」(……)

アンディは、父と言い合いをして、自分も似たような気持ちになったことがあるのを思い出した。しかしそれと同時に、強奪や略奪をしたという非難が父に被せられたままになるのは嫌だった。(S.248)

オラーニエンブルク強制収容所跡を見学する前日に、アンディの叔父は二人に、数年前アウシュヴィッツを訪れたが何も見るものがなかった、と言う。二人はさらに次のように忠告される。

おじさんは首を横に振った。「それがなんだというんだ。もう五十年も経ったんだ。どうして過去をそっとしておけないのか、わからないね。どうして他の過去同様、この過去も放っておけないだろう」

「特別な過去だからじゃありません？」(……)

「特別な過去だって？ 誰だって、その人にとっては特別な過去を持っていますよ。それは別としても、過去というのは作られるものですよ。一般的な過去も、特別な過去もね」

「ええ、わたしの親類たちに対して、ドイツ人は特別な過去を作ったんですわ」(……)

「もちろんおぞましいことだったさ。でもだからといって、オラーニエンブルクやダッハウやブーヘンヴァルトでおぞましい現在を過ごす必要があるのかね？ 戦争のずっと後に生まれて、誰にも暴力を加えたりしていない人たちまで？ 特別な過去というのは場所と結びついていて、その場所にも罪の一部があるからかい？」(S.252)

この叔父のセリフの中には、ナチズムとホロコーストの過去をめぐるシュリンクの歴史観に通じる二つの大切な主張がある。「過去をそっとしておく」ということと、「戦争のずっと後に生まれ」た世代に対する配慮の問題が含まれている。しかしこのことは後に詳しく述べてみたい。

シュリンクが『朗読者』でテーマとしたナチスのホロコーストの罪、戦後60年経った今でも政治家が謝罪し続ける過去の罪科。68年世代のシュリンクは、「両親の世代」つまり「加害者の世代」の次に位置する「われわれの世代」として、作家としてはもちろん法律家、教育者としても、このドイツのトラウマと向き合い、様々に取り組んできた。そうした彼の思いは、この叔父の発言をめぐるアンディとサラの会話に明瞭に表現されている。

「あたたはおじさんと同意見じゃないわよね？」

「どの意見のこと？」

「過去はそっとしておくべきだし、ユダヤ人が騒ぎ立てたりしなければそっとしておけるのって言う意見よ」

「きみだって、戦争から五十年経ってるってことはくりかえし言ってただろう？」

「やっぱりそうなのね」

「いや、ぼくはおじと同じ意見じゃないよ。でもきみみたいに単純に考えることもできないんだ」

「じゃあ、どう複雑に考えているというの？」

アンディは、サラと喧嘩したくなかった。「その話をしなくちゃいけないのかい？」

「この質問にだけは答えてちょうだい」

「どう複雑かって？ 過去をくりかえさないために、思い起さなくちゃいけない。犠牲者やその子供たちへの敬意が必要だから、過去を思い出さなくちゃいけない。ホロコーストからも戦争からももう五十年経っている。父や息子の世代がどんな罪を負っているにしても、孫の世代には負債を残してはならない。外国で、自分はオラーニエンブルク出身と言わなくてはならない人は、立場が悪い。若者は、過去の清算なんてもうたくさんというところで、ネオナチになる—— こうしたことすべてと正しく向かい合う

のは、簡単ではないよ」(S.252-253)

IV

ドイツの戦後を、両親の世代から、68年世代を経て自分の子供たちの世代の未来を見すえながら生きてきたシュリンクの「複雑な」思いが、アンディや彼の叔父の口を借りて切々と響いてくる。この小説にはサラという反ドイツ的偏見をかたくに持ち続ける女性主人公を前にドイツ人アンディの当惑した、しかし正直な気持ちが随所で語られている。

長くなるがもう少しこの小説からの引用をつづけてみたい。二人の恋人のアンデンティティを問いかける危うい会話は、サラの衣服のほころびを繕うかどうかというささいな口論から最終的な局面を迎える。

「穴を繕うなんて大した手間じゃないだろう。そんなに技のいることでもないし、ほくだって自分の服は繕うよ」

「あなたは秩序正しい人だものね」

彼は肩をすくめた。

「そうよティナだったら言うと思うわ、あなたのなかのナチがそうさせるんだって」

彼は一瞬沈黙した。「申し訳ないけど、そんなことこれ以上聞くわけにはいかないね。ぼくのなかのナチ、ぼくのなかのドイツ人——そんなことはもう聞きたくない」

彼女は呆れたように彼を見た。「どうしたの？ どうしてそんなに激しく反応するの？ あなたがナチじゃないことはわかっているわ。あなたがドイツ人だってことにも反対してないわ。ティナは……」

「ぼくのなかにナチを探したり見つけたりするのはティナだけじゃないよ。きみのほかの友だちだってそうだろう。それに、ぼくがドイツ人だってことに反対しないというのはどういう意味なんだ？ なにと比較して、ぼくに寛大であろうというんだい？」

彼女はかぶりを振った。「あなたとなにかを比べることなんてことはないわ。わたしはそんなことしていないし、友だちもしていない。みんなあなたのことが好きだというのはわかってるでしょ。ティナはエタンとわたしたちと一緒に夏には海に行きたがってるし——あなたをナチだと思ってたらそんなことするわけないでしょ。あなたと会う人たちが、あなたがドイツ人であることを知って、どれくらいドイツ的なのか、あなたのなかのドイツ的なものはなにか、それは悪いことなのか、と考えるのは、別にいま始まったことじゃないはずよ」(S.266-267)

この会話はいささか誇張された国民感情をめぐる議論かも知れないが、ドイツの戦後60年の政治社会の歴史をふり返ってみると、ここではトラウマとなった、あるいはトラウマにされてきたドイツ人のなかにある「ドイツ的なもの」が非難されている。良い意味での「～的なもの」ならまだしも、ネガティブな意味あいのステレオタイプの国民性にくくられ、冷笑的に語られる時、個々の人はどのような気持ちになるであろう。

ホロコーストの被害国、加害国という正反対の歴史を持つ恋人同士の絆が、男女の性をもった個人でなく、その国民性を意識したつながりの中に置かれるなら、結局二人はこのような運命をたどるという見本のようなストーリーである。この後アンディが反ユダヤ的の偏見と同じように反ドイツ的の偏見も愚かである、と言ったことに対し、

「どうしてそんなことができるの」彼女は憤りのあまり震えていた。「その二つを比べるなんて。反ユダヤ主義と——ユダヤ人は誰に悪いことをしたわけでもなかったのよ。ドイツ人は六百万人のユダヤ人を殺したわ。ドイツ人の一人と接触すると、そのことを考えずにいられないってこと——あなたはなんて単純なの？　なんて無神経でナルシストなの？　ニューヨークに住んで一年になろうとしているのに、ホロコーストが人々の脳裏を去らないだなんて知らなかったとでもいうの？」

「いったいほくが……」

「ホロコーストとなんの関係があるのかって？ あなたはドイツ人であることで、ホロコーストとも関わっているのよ。みんなはそう考えているのよ、(……)」(S.267-268)

どこまでいっても接点のない、話し合ってもただ虚しさだけが残っていてくアンディとサラの会話。和解不可能な二人の会話の原因とその結末をシュリンクはすでによく知っている。

あれか、これかの選択しかないのだろうか？ 男か女、子供か大人のどちらかでしかないのだろうか？ ドイツ人かアメリカ人、クリスチャンかユダヤ人？ 話してもなんの役にも立たないのだろうか？ 話すことは、相手を理解する助けにはなるけれど、だからといって相手を受け入れられるわけではない。そして、肝心なことは、理解ではなく、受け入れることなのだから？ しかし、受け入れることに関しては——人は結局、自分と同じような人間しか受け入れないのだろうか？ (S.255-256)

アンディに語らせるこうした自問自答は、人との間の話し合いと理解というものの実相と限界を示している。主人公がこのあと、ハイデルベルクの友人の医者のもとで割礼を受け、自分のアイデンティティを放棄し、ニューヨークのサラのもとに帰ってベットをともにしても、理解と和解は不可能である。ここにはおそらくシュリンクのもうひとつのテーマである「故郷」の問題がある。これほど言葉をつくしたあとで、決別を迎えることなくドイツ人として割礼をほどこし、ユダヤ人のサラのところに戻ろうとする意外なアンディの行動は、「故郷を失った者」の放浪と悲劇を象徴しているように思われる。手術後、彼はドイツの故郷の地にも、友人の中にも自分の所属する場所を見つけられない感覚につきまといられる。この小説のラストは、サラと久しぶりに再会し、愛し合った翌朝、静かにサラのアパ

ートを立ち去るアンディの姿を描いて終わる。この短篇集の総合タイトル『逃げてゆく愛』という言葉の二義性があらためて思い浮かぶ。愛が逃げ去ってゆくのか、人が愛の前から逃げてゆくのか？

V

サラの反ドイツ的偏見にもとづく発言の中には、これまで引用してきたもの以外に、「記憶を抑圧する意味」をもつベルリンのホロコースト記念碑、「カオスが我慢できない」清潔と秩序好きのドイツ人、「カテゴリーとシステムを作り上げ」「学問的分析」にいそしむ「即物的で徹底的な」ドイツ文学といった、諸外国から長年にわたって言われつづけてきたドイツやドイツ文化への様々な非難がある。シュリンクはこれまでの反ドイツ的固定観念や偏見をすべてここに記載しておこうとするかのようなのである。

このような恋人に対して、なお誠実に向き合おうとするアンディのころの中には、次第につきのような意識が働きはじめる。

こうしてアンディは、自分の言いたいことを検閲（zensieren）することに慣れていった。サラの友人たちが語るドイツやヨーロッパについての感想が、思い上がった、誤ったものだと思っても、自分としてはニューヨークの生活についてあれこれ批判めいた印象を言いたくなかった。むしろ沈黙していたかった⁵⁾。

この自己検閲という心理作用は、単に「言葉に注意する」「発言に気をつける」といったこととは違うレベルで行われている自己の言論規制のことで、現在のドイツに住む多くの外国人に対するドイツの人々の行動の中にもあり、またドイツの政治家の一挙手一投足の中にもはりめぐらされている自己制御装置であると言える。戦後 60 年経った今でも、ドイツの政

5) Bernhard Schlink „Liebesfluchten“ Zürich 2000 S.237f.

治家がこの自己検閲をおろそかにして、ナチズムの過去に対する不用意な発言をただけで制裁を受ける現実があり、思想家や芸術家が第二次世界大戦におけるドイツを、ホロコーストの加害の側面だけでなく、戦争で受けた被害の面に光をあてた表現行為をすれば、ただちに反ユダヤ主義と非難される精神風土があることを思えば、いかにこの検閲が人々の心の奥深くに根づいているかがわかる。

この自己検閲の意識は、ドイツ人の様々な世代に浸透し、引き継がれていった。このことは次章でさらに述べてみたい。いずれにしてもドイツは、ナチスの被害国であった東欧圏の国々やユダヤ人およびイスラエルからの言論統制とタブー化に対して、長い間その重圧に耐えつづけてきた。第三帝国とホロコーストの罪科、集団の罪、を絶えず反省させられる歴史認識は、ニーチェの「人間は生きるために、過去を解体し破壊する力を持たなければならない、そしてそれを時々行使しなければならない」という言葉を引用するまでもなく、ドイツの人々に当然の心理反応を起こさせてきた⁶⁾。この兆候は、過去10年をふり返ってみて、ますます顕著に様々な文化面にも現れてきている。

思想家としてのM. ヴェルザーが、1998年フランクフルトのパウル教会で行ったドイツ書籍協会平和賞受賞スピーチでの「アウシュヴィッツを道具化するな！」という発言はメディアに大きく取り上げられ、多くの市民、知識人に強いインパクトを与えた。「歴史の見直し」「歴史の掘り起こし」などという言葉で日本にも報道されてきたドイツのこうした動きをさらに加速させたのが、ノーベル賞作家G. グラスの『蟹の歩み』（2002年）であろう。小説ともドキュメンタリーともルポルタージュとも読めるこの作品は、第二次世界大戦の終戦直前、戦火の激しくなった旧ソ連領を脱出するため、女性や子ども約9000人が乗り込んだドイツの避難船ヴィルヘル

6) 「生に対する歴史の利害」 Friedrich Nietzsche: Sämtliche Werke KSA 1 S.269 Berlin 1988

ム・グストロフ号が、旧ソ連の潜水艦に撃沈された実話をもとに書かれている。この作品で、ドイツが戦争の加害国であるばかりでなく被害国でもある姿をはじめて公にして、過去の史実の見直し気運を高めた⁷⁾。

このように47年グループ作家のM. ヴァルザーとG. グラスがこうした右派的動きのきっかけを作ったという点はとても興味深い。グラスは、難船グストロフ号から生きのびた女性ウルズラと、その船上で生まれた息子パウル、記者でもあるこの彼の息子（彼女の孫にあたる）コンラートがネオナチ化していく姿を親子の心理的葛藤の中に描き、最後にこの右傾化した若者コンラートはユダヤ人と思われる男を射殺し、裁かれ服役する。他にもこの作品は、グストロフ号の成立史を物語風に描き、戦後のこの難船をめぐる極右サイト掲示板を皮肉をこめて検索しつつ紹介している。グラスの作品をいま詳しく論評はできないが、この本をよく読めば、社民党の故ブランド首相を熱烈に支持し左派的言動で有名なこの作家が、加害国から被害国へのドイツ史の見直し、修正をもつばら意図して書いたとは思えない。ところが結果的に当時のドイツ出版界によって、被害国ドイツに光をあてる内容をもっていると受けとめられ、さらに極右勢力からもこのように解釈されたという点で、この作品がドイツの今の時流、保守的な大きな流れの中に吸収されたと見たほうがよい。またこうした文化現象のなかに、現在の過度的な、政治社会上の変化の渦中にあるドイツの戸惑いと混乱を読み取ることができるかも知れない。

7) 以上に関しては「戦後史の見直し進むドイツ」の記事が参考になる（朝日新聞2003年12月10日）この記事には日本でも公開された映画「ベルンの奇蹟」（2003年）にも言及している。また2005年6月に公開されたドイツ映画「ヒトラー 最後の十二日間（Untergang）」（2004年）がヒトラーを一人の人間として描き、「ドイツはついに戦後のタブーを壊した」とまで言われて話題になった。

VI

これまで見てきたような過去の罪科と集団の罪にあえいできた加害国ドイツの歴史を見直し、自己認識を正し、あらたなアイデンティティを求める問題提起をしているのが、シュリンクの『薄氷の上で』というタイトルのエッセイであると思う。「割礼」という小品で、小説のバランスを崩してまで、それぞれの過去を背負ったドイツ人とユダヤ人主人公二人の会話を中心に置いて、これまでの戦後ドイツの負の歴史の問題点を提出、記録したあとでシュリンクは、2001年雑誌「シュピーゲル」19号に「第三帝国とホロコーストを考える必要性と危険性について」という副題のついたエッセイを発表する⁸⁾。「シュピーゲル」誌のこの時の特集テーマは、「ヒトラーの長い影」と題され、はじめにヒトラーに対するドイツ人の興味深いアンケートを紹介しつつナチスをめぐる戦後ドイツ史をまとめ、イギリスの歴史学者イアン・カーショウが「ドイツ人のトラウマ」について書き、ヨアヒム・フェストが「悪の権化」と題した対談を行い、そのあとシュリンクが評論を寄稿している。カーショウのエッセイの副題に「残虐な戦争から56年経っても、ドイツ人とヒトラーとの関係は終わろうとしない。この過去はなぜ過ぎ去っていかうとしないのか？」と書かれているのが印象的だ。

数年のうちに私の世代は60歳になる。私たちの世代は第二次世界大戦の終盤から戦後まもなくドイツに生まれ育った。50年代の復興期の時代を享受し、飽食し、その時代に抵抗するようになった。60年代に政治的になり、70年代に職業、労働の世界にはいり、80年代にキャリアをつみ、90年代からは政治、経済、教育、報道の分野で重要な地位をしめるようになった。

8) このエッセイは、B. Schlink „Vergangenheitsschuld und gegenwärtiges Recht.“(2002 (邦訳『過去の責任と現在の法——ドイツの場合』)のエピローグにも使われている。引用は Der Spiegel Nr.19 から行う。

数年たてばわれわれの命運も尽きてくるであろう。

わたくしたちの世代の人間は誕生日にスピーチをして、これまで何をしてきたか、何をしなかったかを語る。ほとんどのスピーチは、第三帝国とホロコーストの過去に触れることになる。(S.82)

静かな語り口でシュリンクは、自分の世代の説明からはじめている。短編集『逃げてゆく愛』より5年前の『朗読者』の中ですでにシュリンクは、戦後10数年経ってはじまったナチズムの共犯者たちを告発する裁判を描きながら、ドイツの68年世代の実態を自分もその中にいた者として取りあげている。この作品以来、あるいはミステリー小説『ゼルフ』シリーズ以来シュリンクは一貫して、ナチズムの過去に対する、ドイツの世代間による対応の違いに思いをめぐらせてきたように思われる。ナチスの行った戦争に加わり、ナチ党员となり、ナチの要職にあったものを戦後黙認してきた両親の世代を告発する68年世代。2005年時点のドイツ現政権のシュレーダー首相、フィッシャー外相、ケーラー大統領もほぼこの世代の人々である。シュリンクは1944年生まれでまさしくこの世代に属し、その世代を内側から見つけてきた。彼はまさにこの戦後60年を生きて、両親の世代（加害者の世代とも言われる）、我々（自分たち）の世代、若い（子供たちの）世代を法律学者、作家、教育者としてつぶさに見てきた、と言ってもよい。

60年代に第三帝国とホロコーストがテーマとなったとき、このテーマはあらゆる反対を押しきって主張されなければならなかった。過去を忘却し抑圧しようとする勢力に対抗するために、このテーマはかたくなに堅持されねばならなかった。(……)

その結果、ある種の平板化現象をきたした。過去を偲ぶ記念碑、記念行事、忘却と抑圧に抗する会議、書物、記事——また、コソボをアウシュヴィッツと、サダム・フセインをヒトラーと、ベルリンの壁を警備する兵士を強

制収容所の看守と、今日の外国人排斥問題を反ユダヤ主義と比較するとう、私の世代がこれまで執拗に繰り返してきたこうした習慣は、結局過去の意味をバラ銭のように散逸させている。

このことは次の世代の人々に不幸な結果をもたらすことになる。かれらが時に示す第三帝国とホロコーストの歴史に対する嫌悪感は、学校やメディアでこの歴史が果てしなく取り上げられ繰り返されているからである。また彼らがこの歴史を話すときの軽々しく皮肉っぽい語り口も、その原因は、私たちの世代が倫理的な重要性も持たせずにいつも大げさにこの過去を取り上げ、他の社会的事件と比較してきた点にある。(S.83)

「バラ銭 (kleine Münze)」のように「散逸させて (verspielen)」という箇所「バラ銭」の比喩をシュリンクは、エッセイの他の箇所で「過去が現在になにも問いかけず感情に訴えないとき、つまり過去が切り詰められ、いわばバラ銭に替えられて支払われてもなんの利益もない。過去の道德遺産は、バラ銭の形になったらむしろ無きに等しい失われたものである」と語っているように、特別の意味をこめて使っている。ちなみにドイツ語の verspielen は〈賭け事で所持金を失っていく〉という意味がある。ホロコースト、あるいはユダヤ人虐殺の代名詞としてのアウシュヴィッツという言葉、現代の新しい社会事件と軽々しく比較しても遊び、撒き散らすことによって、言葉の内実を失い、ホロコースト、アウシュヴィッツという言葉だけが空疎にメディアからくり返し響いてくる。シュリンクも評価しているヴァルザーのパウル教会の講演内容、「まともな人ならアウシュヴィッツを否定したりしない。非常識でない人ならアウシュヴィッツの残虐性に疑いの念をもったりしない。しかし連日メディアで過去のこの報道をされると、私の中でドイツの過去の罪科を常につきつけられていることに対する反発心が起き、目をそむけなくなる。アウシュヴィッツという言葉が、たえず人を脅迫する言葉になり、いつでも持ち出せる威嚇手段、モラルの棍棒あるいは義務としての演技になることは好ましいことではな

い。こうした儀式化によって生ずるのは、口先だけの祈禱と同じたぐいのものだ」という言葉とほとんど符合している⁹⁾。

いずれにしても両親の世代を告発する 68 年世代に対するシュリンクの目は厳しい。すでに『朗読者』のなかで、主人公ミヒャエルの口を通して「私たちの世代によくある思い上がった自己正当化はどこからくるのだろうか。罪と恥を感じながら、同時にどうして自己を正当化できるのだろうか」(S.159) と批判している。『薄氷の上で』のエッセーでシュリンクは、自分の世代の自己批判をさらに深く掘り下げ、自分の息子たちの世代、「割礼」のアンディの世代へと視線を向けている。

VII

シュリンクが自分たちの世代を反省をこめて述べたあとで、今もなおドイツ人の意識から去ろうとしない過去の克服について、またこれからのドイツ史をどのように再検討し、記述していくべきか提言している。

過去の克服が可能であり必要であるという考えの底には、過去から自由になりたいという憧れがあるだけでなく、それは自由への希求を支えるものでもある。そうした課題にひたむきに取り組む者は、その課題がいずれは解決されることを期待しているし、ひとたび解決されたならその課題に拘束されたくないと思えるのが普通である。過去を記憶する作業をおこなってきた人はもう過去にしばられたくないと願うものだ。記憶する者だけが忘却することを許される。

ドイツの過去の罪科を十分意識、記憶しているわたくしたちの世代の者が、ナチズムの過去が理由で外国で拒否され、憤慨するときこの逆説は明らかになる。自分たちは過去の歴史にこんなに必死で取り組んでいる、そ

9) <http://www.welt.de/data/1998/10/12/665272.html> ? search=Walser+Paulskirche&searchHIL1=1

れなのに他の人がどうして恨みがましくわれわれを過去につなぎとめておこうとするのだろうか、と。

トラウマとなった過去にしばられたくないという願いは間違っていない。間違っているのは、トラウマとなった過去にこだわっていれば過去から自由になれる、と思いつくことだ。国民全体と個人の過去がトラウマとなるのは、過去を思い出す必要がないときに思い起こし、その上それを他者から強制されることである。過去に拘束されることは過去を抑圧、排除することと表裏の関係にある。トラウマを脱却するためには、想起し、忘却することが出来ること、想起、忘却をうながす不干渉の態度が必要である。(S.84)

最後の「不干渉の態度」という言葉は、ドイツ語では *ruhig lassen* で、III 章で「割礼」から引用したアンディの叔父のせりふ「もう五十年も経ったんだ。どうして過去をそっとしておけないのか、わからないね。」という言葉の「そっとしておく」の原語と同じである。「ドイツの過去の罪科を十分意識、記憶しているわたくしたちの世代の者が、ナチズムの過去が理由で外国で拒否され、憤慨するとき」という言葉も、「割礼」の主人公アンディがニューヨークで、サラというユダヤ人女性に拒まれたことにそのまま移し変えることができる。ただアンディは「わたくしたちの世代」でなく、すでに次の世代の人間であるが。

法曹界で、あるいは教育分野で、過去の克服に長く真剣に取り組んできた作家シュリンクだからこそ書ける上記の引用文の内容は、切実であり、痛切である。言葉の自己検閲を強いる過去から解放されたい、トラウマから脱け出たいと願うドイツ人が、他者から想起、記憶を強制される。これが戦後 60 年経ったドイツの現状であろう。しかしシュリンクは、この現状をことさら嘆くことなく、「他者」に自分たちの忘却と記憶の作業に干渉しないように要求している。「他者」、あるいは「他方の側」とは、もちろんユダヤ人のことだ。「他方の側が犠牲を嘆き、加害者を告発し、その

子孫から損害賠償を要求しながら、自分たちの過去を、いかに想起し忘却して過去のトラウマから脱却するかはかれら自身の問題である」「われわれは、この他方の側がする告発、告訴をそのまま受けつづける必要はない。相手が告発するから、その告発が正しいと思う必要もないし、提訴したから賠償しなければならないわけではない」

エッセイの最後の章でシュリンクは、これからの世代の人々のために、ドイツ史を今後どのように組み替えていくべきか述べている。

ドイツ史は、第三帝国とホロコーストの歴史的事件に収斂し、この二つのなかで完成されるかのように見られてはならない。ドイツ史は、単にこの側面からのみ現在に対する意味を与えられ、想起され、取り扱われてはならない。

この二つの歴史的イベントだけがドイツ史全体を支配するならば、それはまた別の側面を生ずる。つまりこの歴史的イベントはドイツ史を狭めるだけでなく、ユダヤ史をも支配することになるであろう。

個人の歴史をきちんと持てないならば、自己認識も他者への関係も歪んだものになる。ドイツ人であることに誇りを持ちたいという若い世代の願いのもとには、整合性のある自己認識と他国にたいする正しい関係をつくり上げたいという要求がある。いまの若い世代の人々にとって、第三帝国とホロコーストの過去がもつ意味は、わたくしの世代がもっていた意味とは違ったものになっている。この過去がかれらに軽視されるべきでない、と考えるなら次世代のために過去は変容、統合されねばならない。(S.86)

こうしたナチズムの歴史が統合されて、新しい国民全体のドイツ史が書かれるのは、まだまだ先のことも知れない。しかしシュリンクは、ここでそのための方向を示し、エッセイの最後をつぎのように結んでいる。

過去が現在にたいして持つ意味を、未来につなげていくことが歴史であるから。

VIII

作家であり、法律学の教授であるシュリンクの過去の取り組みをめぐる発言は、68年世代のジレンマから抜け出た明瞭な方向性をもっている。すでに触れた、法律学者としてナチスの罪を歴史的に論述した書『過去の罪科と現在の法』の中の〈法による過去の克服〉の章でもシュリンクは、戦後の第一世代、第二世代を厳しく反省したあとで、第三世代を「ヒトラーの影」から、ホロコーストの罪と責任から解放しようとしている。

第三帝国の加害者が排除され、追及され、裁かれなかったこと、彼らが黙認され、尊敬され、元の職についたままキャリアを積んだということ、親として教師として受け入れられたということ、このことで加害者の世代とその子供の世代は、第三帝国の罪と犯罪に巻き込まれた。巻き込まれないようにするためには、加害者を徹底的に追放し、追及し、断罪することが必要であった。しかし加害者、正犯、共犯、黙認した者、見逃した者があまりにも多かったため、徹底して追及することは不可能であった。世代間の心理の上でも、徹底させることが出来なかった。つまり第二世代である子供たちは、第一世代の両親を一貫して追及、排除することが出来なかった。徹底して排除し、罪を問い、裁くことがもっと行われなければならなかったが、それは十分に行われることがないままになった。このことは結局、ナチスの罪科に戦後巻き込まれることが不可避であり、それは悲劇的な様相を帯びることになった。……

第三世代は、加害者を追放するか、あるいは彼らをそのまま社会にとどめておくかの選択に、もはや迫られることはない。加害者を追放しないことで、第三世代はかれらの罪に巻き込まれることはない¹⁰⁾。

10) B. Schlink „Vergangenheitsschuld und gegenwärtiges Recht.“ Frankfurt 2002 S.97ff.

すでに述べた、第二世代のシュレーダー首相の2005年1月の「アウシュヴィッツ解放60周年」のスピーチから引用してみたい。

今日生きているドイツ人の大半にホロコーストの罪はない。しかし特別の責任がある。ナチズムの戦争と大量虐殺を記憶することは、ドイツ人の生きた憲法の一部となった。

その一部をになうことは、人によって難しいかもしれない。だからといってこのホロコーストを記憶することは、ドイツ国民のアイデンティティの一部であるという事実はなんら変わりがない。ナチズムとその犯罪の時代を記憶することは道徳的義務である。この義務は犠牲者、生存者とその親族に対してだけでなく、わたくしたちドイツ人に対する義務でもある。この記憶を抑圧し忘却したいという誘惑は大きい、しかしそれに屈してはならない¹¹⁾。(傍点筆者)

シュリンクとは違う形で、シュレーダー首相は現在のドイツ人、若い世代のドイツ人のトラウマを取り除こうと努めている。政治家として、つねにこのような過去の反省を織り込んだ話し方をしなければならないことは理解できる。1990年東西ドイツが統合され、EUが統一され、現在さらに拡大の道を歩む中で、フランスと共に政治経済的に重要な役割を果たしてきたドイツの政治家、知識人はたえず過去の罪を自覚し、良心を公表するスタイルを取らざるを得なかった。とりわけユダヤ人を前にした際はそうである。しかし傍点の部分と「ドイツ国民のアイデンティティの一部」との間の矛盾とディレンマは、戦後世代の心情を色濃くにじませている。2004年のノルマンディー記念式典の講演前後から、シュレーダー首相の発言内容には、ナチスの過去とこれからのドイツの歩みの間に一線を画そ

11) <http://www.welt.de/data/2005/01/26/418841.html?search=Schroeder+Rede&searchHILI=1>

うとする意図が顕著になっている¹²⁾。

IX

I章で、シュリンクの作品世界には、時代の情況が色濃く投影されると書いたが、彼はすべての作品でナチスとホロコーストの罪の問題を扱っているわけではない。いわばゼルプシリーズといえる推理小説は、戦後の西ドイツと統合後のドイツ社会が舞台となって展開され、また『逃げてゆく愛』の短編集の「もうひとりの男」「甘豌豆」「ガソリンスタンドの女」は、人間の心理や感情を、時代状況や過去の克服の問題とやや切り離して掘り下げ、普遍的な文学テーマを独特なタッチで探求している。

しかし『朗読者』で一躍注目され、現在もなおこの作品の作者として紹介されつづけるシュリンクに対して、文芸評論家から、厳しい批評が下されることもある。これらの批評は、すでに述べたように、数年前からナチスの加害者としての側面だけでなく、戦争の被害者としてのドイツを描こうとする国内の気運の高まりを感じ取るなかで行われているように思われる。例えば、雑誌「シュピーゲル」2002年15号に「現代ドイツ文学に対する疑念」というタイトルで、シュリンクやグラスの最近の作品に対する批評が紹介されている。副題には「〈グラスの『蟹の歩み』、シュリンクの『朗読者』のような成功をおさめた作品は、ホロコーストや第二次世界大戦におけるドイツ人の罪を無害化しているのではないか?〉という奇怪な文学

12) この小論で私は、ドイツの戦後と日本の戦後を比較してコメントする気持ちはない。シュリンクをはじめ、ドイツのユダヤ人評議会議長が発言しているように、ナチズムの犯罪は、「未曾有の」「他と比較できない」性質のものである。日本とドイツの戦争は、歴史的経緯も内容も異なるものだから、戦後賠償のあり方も当然異なるし、ニュールンベルク裁判、その後の西ドイツの裁判と東京裁判も異なる。ヒトラーとその側近たちと日本の「A級戦犯」を比較することも愚かなことである。それぞれ異なる歴史認識、視点を持って見ていく必要がある。

論争に評論家は備えている。」現代ドイツの文学風土をとらえておくために、この評論のはじめの部分を引用してみたい。

さまざまな方面から非難の声が上がっている。スイスの「新チューリヒ新聞」は、ドイツでは「自国の歴史に対するあらたな無反省」がはびこっている、と指摘している。「加害国から被害国へとドイツ社会が転換するきざしはすでに以前からあったが、ドイツの被害国の苦しみを文学のテーマとして描くことにより——例えば、グラスのベストセラー小説『蟹の歩み』——、ホロコストの犠牲者と生存者の不幸を相対化しようとしている。「南ドイツ新聞」は新作を発表した作家ペーター・シュナイダーを「彼は作品でドイツ人の罪を軽減することを意図している」と述べている。ハンブルクの雑誌「中道36」は、バーゼル在住の作家ディーター・フォルテを「ドイツの戦争犯罪の問題を回避するために、小説中の登場人物すべてを犠牲者として描いている」と非難している。

(……)

シュリンクにきわめて厳しい批判をしているのが「南ドイツ新聞」に掲載されたヴィリー・ヴィンクラーの評論である。「シュリンクはドイツの過去をすべて片付けようとしている」……「『朗読者』の中にはおどろくほどのイデオロギーの欠如がある」……「スピルバーグ監督の映画『シンドララーのリスト』を見てドイツ人は心地良さを感じているが、それはもちろん許されないことである。このことはシュリンクと彼の小説世界についても言えることだ」……「シュリンクは当たり前のように、ユダヤ人虐殺を小説というひとつのモデルケースの中で釈明しようとしている。作家活動をしながら、そのかたわら法律学教授、判事であるシュリンクは、作家は作品内でひとつの個別ケースしか審理できないのだということを知らないのだろうか¹³⁾」

「シュピーゲル」のこの記事は、おもにネガティブな批評だけをまとめ

で取り上げて解説したものだが、こうした論調の中から読み取れるのは、ドイツ文学はこれからも、第三帝国内の不幸なドイツの人々の姿と、苦悩する戦後社会のありさまを描いてはならない、という強い圧力だ。ヴィンクラーの「イデオロギーの欠如」という言葉も、「作家は作品内でひとつの個別ケースしか審理できない」という意味も不可解である。文学にイデオロギーを持ち込み、作品内に「審理」を求め、いずれ裁定を下す機能を付与しようという意図なのだろうか。批評家ラニツキーをはじめとするこれらの文芸評論家、あるいは酷評家たちの文を読んでいると、戦後60年たつてドイツ文学は、一体なにを描けばよいのか、という疑問が起こる。とりわけナチズムの長い影がのび続けてきた戦後ドイツで、いまだに加害国の罪と責任を反省し告発するだけの文学しか許されないのだろうか。「アウシュヴィッツの後で詩を書くことは野蛮である」(アドルノ、1950年)と、相変わらず文学の分野で叫び続けるつもりだろうか。これからのドイツの作家のアイデンティティは、どこに求めていけばよいのだろうか。

現在もドイツでは、ヒトラーの『我が闘争』を資料として読もうと思っても出版禁止になっているし、鉤十字をはじめとするナチスのシンボルも広く禁止されている。このタブー化はドイツ法務省の管轄だが、上記引用のような文芸評論を読むと、芸術の分野でもまさに戦後すぐはじまった「非ナチ化」の動きが、裏返された形で今もなお続いているような錯覚にとらわれる。

今は紙数との関連でシュリンクの『朗読者』をはじめ、この中で言及されているペーター・シュナイダー、ディーター・フォルテの作品を詳述することは出来ないが、雑誌「シュピーゲル」とのインタビューでシュリン

13) 2002年「シュピーゲル」15号の、この時の文芸欄のベストセラーの文学部門の1位にはグラスの『蟹の歩み』が、一般書部門の8位にはヒトラー映画『ヒトラー 最後の12日間』の原作である、ヨアヒム・フェストの同名の書物がランクされている。引用はS.178f.

クは、『朗読者』の主人公、強制収容所の女看守として戦後、有罪判決を受けたハンナを、「彼女に対する人間的視点もテーマだった」、「加害者に対する人間的視点がなければ、かれらを取り上げる意味がない。かれらに人間的なアプローチをすることによってのみ、犯した犯罪の重要性を明らかにすることができる。加害者がわれわれとは何の共通点も持たない怪物（モンスター）であるなら、はじめから無関係なものとして切り捨てていたでしょう」と語っている¹⁴⁾。よく読んでみれば、『朗読者』はナチズムの罪の加担者の裁判だけをテーマにして取りあげた小説ではない。年齢差の大きい男女二人の愛の姿、文盲というハンディを負った女主人公の屈折した行動、戦後世代のミヒャエルが傍聴するナチス裁判での弁護士、検事、裁判官の微妙な心理の動きと綾、後世の人間が歴史を理解し裁くことのディレンマ、ミヒャエルの心理と感情の振幅の機微……。『朗読者』でも「割礼」でも、その主人公たちは、ドイツの過去と取り組み、過去を「克服」することはできないとしても、「記憶する者だけが忘却することを許され」たあとで、本来の文学上のテーマ、そのスタートライン上に立って、自分の「故郷」を模索し始めているように思われる。今後、シュリンクのテーマのひとつであるこの「故郷」の問題が、どのような展開を見せていくかが注目される。

X

シュリンクは1999年、Welt紙とのインタビューで次のように述べてい

14) Der Spiegel Nr.4 2000 S.183

ナチスの加害者の中に〈モンスター〉を見るのなら、Helga Schneider „Laß mich gehen“ 〈München 2003〉

(邦訳『黙って行かせて』ヘルガ・シュナイダー 新潮社 2004)に出てくる母親、かつてナチス強制収容所の看守だった母親は、どのような後悔の念も反省も示そうとしないモンスターの例かも知れない。この本はむしろ両親の世代と第二世代との間の架橋できない断絶を痛切に感じさせる。

る。「辛口の批評家ラニツキーが、TV番組〈文学四重奏〉で視聴者にも楽しめる番組作りをして、自分でもエンジョイしていることは確かだ。しかしドイツの文芸評論自体、問題を抱えている」「ドイツの批評家は、基本的に自分が作家より優れていると思い込んでいる」「ドイツで作家は、社会との接点を見失っているという点は問題であると思う。この点でも、アメリカの文芸作家が、社会とのつながりの中で捉えられていることは示唆に富んでいる¹⁵⁾」ドイツの作家は、社会との接点を見失っている、という発言は、文学史的には〈ドイツ的内面性〉というキーワードで19世紀以来たえず指摘されつづけてきたドイツ文学の一特徴であり、このことを意識してシュリンクは語っているのかもしれない。しかしこの発言は、他の彼のインタビューでもしばしば取り上げられているように、この年に渡米し、有名なオプラ・ウィンフリーの番組「ブック・クラブ」にドイツ人作家として初めて出演した時に受けたアメリカ社会へのポジティブな印象のなかで行われている。(ちなみに同番組の出演で、『朗読者』の発行部数はさらに急増し、世界的ベストセラーの地位を確実にした。)

このインタビューで彼は、法律学の教授職と作家活動の二重生活形態を変えるつもりがないか、と問われて次のように答えている。「いえ、そのつもりはありません。私にはこの形が合っているのです。どこにも私の落ち着く場はありません、法律学の中にも、作家活動の中にも。なぜなら私は作家であり、法律学者だからです。作家活動だけに専念することには、ためらいがあります。法律学の職業が持つ課題、人間的つながり、問題提起は刺激的で、挑発的な内容に満ちています」

V章で述べた、G. グラスの長い間の左派的行動と発言、近年ではM. ヴァルザーの小説『ある批評家の死』をめぐるラニツキーとの論争を見ても分かるように、「社会とのつながりの中で」作家がとらえられる場合、ド

15) <http://www.welt.de/data/1999/04/03/627758.html?search=Bernhard+Schlink+Verlorenheit&searchHIL1>

イツでは片方の極である反ユダヤ主義に触れるか、触れないかに注目され判断される思想風土が宿命のように存在している。それゆえ短絡的に、ネオナチや極右などと解釈され、片づけられてしまうことにもなる。ユダヤ人、東欧圏、イスラエルへの配慮を怠らず、冷戦時代を生きぬき、東西ドイツ統合後はEUの統一、拡大に心をくわいてきた戦後ドイツで、作家が「社会との接点」を持ちつづけるということは、きわめて難しい態度決定を自らに強いることであろう。前章の「シュピーゲル」15号の中の引用で、作家ディーター・フォルテも「現在も引きつづき行われている、加害者か被害者かという戦後ドイツの論争に巻き込まれずに、そもそも作家は作品で主人公の心の傷跡やトラウマを描くことが出来るだろうか」と自らに問いかけている。

シュリンクは作家活動をスタートさせる前から、法律学の専門家であり、大学での教授であり、連邦憲法裁判所の判事も務めているという現在までの経歴が示すように、作家としては社会の様々な側面と接点を持つ恵まれたポジションにある、と言うことが出来る。『朗読者』の結末に近い箇所ですリンクは主人公ミヒヤエルに、「ぼくは当時、学校ではじめて読み、帰郷の物語として記憶に残っていた『オデュッセイア』を再読した。……オデュッセウスが帰郷したのは、故郷にとどまるためでなく、また新たに旅立つためだった。『オデュッセイア』は、目的地があり同時に目的地がない、成功し同時に失敗したある運動の物語だ¹⁶⁾」と語らせている。オデュッセイアに対するシュリンクの深い思い入れは、戦後ドイツの歩みの中で文学作品の内と外で時代と社会との接点を求め続け、「目的地があり同時に目的地がない」果てしない運動、作家としての営為を根気よく誠実にくり返していこうとするたゆみない意志からきている。前章で紹介した「シュピーゲル」誌（2002年15号）とのインタビューのタイトルは „Ich lebe in Geschichten“ となっている。このタイトルとオデュッセイアに対する思

16) Bernhard Schlink „Der Vorleser“ Zürich 1995 S.169

いは深いところでつながっていて、とくに Geschichten という言葉はここでは翻訳不可能に思われる。ドイツ語の Geschichte は、日本語では「歴史」とも「物語」とも訳される言葉だ。作家としての豊かな想像力を持って、「過去が現在にたいして持つ意味を、未来につなげて」いこうとする永遠の歴史運動の中に身を投じるシュリンクが語る言葉として、„Ich lebe in Geschichten“ は彼の思いを端的に言い表しているのではないだろうか。(了)